

# 持続可能社会における女性活躍を考える

Importance of Women's Participation for a Sustainable Society

須賀 由紀子

SUGA Yukiko

## 1. はじめに

「女性活躍」「男女共同参画」の推進は、ジェンダー・ギャップ指数の改善が見られない日本社会<sup>1</sup>において、必須の取り組みとなっている。2016年4月には女性活躍推進法（女性の職業生活における活躍の推進に関する法律）が施行され、政府も毎年女性活躍・男女共同参画の重点方針（「女性版骨太方針」）を示し、年度ごとの重点施策や年度目標を設定して予算措置を講じている。「女性版骨太の方針2024」では、女性活躍・男女共同参画を推進する「人材の育成」を横串に据えて、女性活躍を進めるとしている<sup>2</sup>。企業も、有能な社員が離職しないためにも、また優秀な若手に入社してもらうためにも、ワークライフバランス施策や健康経営などに注力している。男性の育児休暇取得も伸び<sup>3</sup>、「女性活躍」「男女共同参画」の推進は牛歩かもしれないが、少しずつ進展している。

そのような中で、本稿で問いとしたいのは「女性活躍」のあり方である。これからの時代は、右肩上がりの経済成長の社会ではなく、心豊かな生き方や持続可能な地球環境を求めていく成熟型社会とされる。環境、文化、経済をいかに「サステナブル」（持続可能）なものとしていくか、そのための「暮らし方」が問われている。換言すれば、経済成長論理の「女性活躍」とは違った、持続可能な社会づくりのための「女性活躍」の考え方を、これからの時代を担う女子大学生たちに示し、その主体となることへの意識づけを行うことが必要ではないだろうか。

## 2. これからの暮らしと社会

### 1) 「生命誌」からの知見

「持続可能性」がテーマとなるこれからの社会に必要な考え方として、ここでは「生命誌的世界観」を取り上げる。

「生命誌」とは、生命学者中村桂子によって提唱されたものであり、「地球上に暮らす生きものは全て40億年ほどまえに生まれた祖先細胞から進化した仲間であり、人間もその一つ」という、20世紀後半に急速に発展したゲノム（＝細胞を動かせる基本情報）研究の成果を元にする。生命「史」ではなく、生命「誌」という漢字を使う背景には、生きものの世界を長い時間と大きな空間の中で捉え、生きものの命を「物語」として語り、「科学が明らかにした生きものの生き方の本質を、科学者の中だけのものとするのではなく、文化として誰もが楽しめるよう」にし、「絵や音楽と同じように人々の心を豊かにするものとして、生命のふしぎを楽しむ暮らしを日常にしてほしい」という思いが込められている（中村2019:153-163）。

生きものは生きものからしか生まれえない。従って、地球上のいかなる生きものも、40億年という時間なしには存在しないのであり、一人の人間である「私」という個体の中にも、40億年の歴史が内在している。この40億年という長い時間の蓄積の中で紡がれてきた「生きもののありよう」から人間の在り方を捉え、「様々な生きものの一員としての人間である私」というまなざしを持って、日々の暮らしやこれからの社会を発想することの大切さが主張される（中村2024）。

生命誌の知見に基づけば、すべての生きものは、生きものとしての基本のはたらきの「共通性」を持ちながら、多様な形をとって巧みに共存しているところから、「多様性」と「共生」が、生きものとして自然ということになる。

また、私たち個体の中では、細胞が常に代謝（生と死の循環）し、血液が循環して生きている。そして、個体の生と死の循環が生物世界を作り、自然界全体も資源と排泄物、生産と消費が相互に交換されて存続している。この「循環」というしくみも、生きものの世界の本質の一つである。

生命誌という見方で生きものについて見つめ続けてきた中村は、生きものの世界の特徴として、7つの面があるという。すなわち「多様だが共通、共通だが多様」「安定だが変化し、変化するが安定」「巧妙、精密だが遊びがある」「偶然が必然となり、必然の中に偶然がある」「合理的だがムダがある」「精巧なプランが積み上げ方式でつくられる」「正常と異常に明確な差はない」。お互いに矛盾することを抱え込みながら、だからこそダイナミズムが保たれている。「矛盾に満ちたダイナミズムこそ生きものを生きものらしくしている」のであり、この矛盾に満ちたダイナミズムを楽しむことができる社会づくりこそが、これからの社会に大切ではないかと指摘する（中村2014:255）。

こうした生命誌のものの見方が示すのは、人間が自然を支配して自然に手を加えて改変することが進歩だとした「機械論的世界観」から、生きものの本質から人間を捉える「生命誌的世界観」への転換である。それは、効率性・生産性を求めるがゆえに均一性・均質性をよしとした社会から、「矛盾に満ちたダイナミズム」を楽しめるような暮らしや社会への価値転換であり、人間らしい暮らしの復権とこれからの持続可能な地球社会のために、

必須の、そして科学的知見に基づく説得力ある考え方といえるのではないだろうか。

## 2) 望まれるライフスタイル～「人としてのいのち」を生きられるように

この生命誌的世界観に基づくと、これからの望まれる暮らし方・ライフスタイルは、「人としてのいのち」を充実させる場である暮らしを、丁寧に生きることである。それは、具体的には次の3つのフェーズで捉えることができるのではないだろうか。

第一に、生命誌の知見によれば、「今」を精一杯生きるということが、本来的に生きものとしてのあり方の共通性である。人間はそれぞれのいのちを生きる営みが「生活」という多様な文化になるのであるから、大げさなことでなく、日々の暮らしの中の「今」という時間を、平凡でも心をかけて丁寧に紡ぎ、自らの生活文化を作ることが、「人としてのいのち」を生きることの基本となる。そして、生活文化は地域性と切っても切り離せない関係にあるため、地域の歴史や文化、自然と意識的に関わる時間を取り入れることが望まれる。

第二に、家族という、いちばん小さな共同体、および家族を取り巻くコミュニティを、贈与・互酬性の健全なる関係が感じられる場にするのである。地球上の様々な生きものの中でも、特に人間は、「共食」と「共同による子育て」を特徴としている。このため、様々な人との共生は所与のものであり、「生きることと愛すること」を一体化させて生きる様式をもつことになった（広井2009）。今日では、文化的差異や障がいのあるなしなどに関わらず、あらゆる人がその出自などを問われることなく、ありのままでいられるよう、多様な人の混ざり合いの中に価値を見出す包摂的な居場所づくりが地域などでも行われているが、このような場のありようが、「人としてのいのち」を生きることの豊かさを示唆している。

第三に、生きるために必要な時間（睡眠や生きるために必要な食事）や生計を立てるための仕事の時間から離れた自由な時間を「人としてのいのち」を生きるという時間に充てていくことである。人間は、身体を通して多様なものを感受し、それを表現する言語を豊かに持ち、想像力を以て目に見えないものを描き、新たなものを創造し、自身が生きる世界の価値観を得ていく。レジャーとして行う文化・芸術やスポーツなどの活動も、いわば「遊び」であるが、その遊びをより高いパフォーマンスを求めて美しく表現することを通して、生涯を通して人としてのいのちを豊かにし、深めていくことができるのである。

## 3) ライスステージ社会と男女の共生

このような「人としてのいのち」を生きるため、「一人ひとりの人間がその一生を思う存分生きられる社会」の発想を持つことが大切になる。その受け皿として、人生の各ライフステージでその発達課題に応じ人として豊かに生きられるような社会、「ライフステージ社会」が望まれる（中村2014:263）。一人ひとりが人生のプロセスにおいて、地域や自然と関

わり、生命誌的世界観を内在化させていくような生き方ができる社会が、これから必要な社会づくりとなる。

そのためには、男女の性別役割分担についても、生物としての役割分担、また文化の中で培われた役割分担に基づき、もう一度見直してもよいのではないだろうか。生物としては、オスとメスの役割があり、身体的差異があることは事実であり、性差があること自体は価値とも捉えられる。それぞれの特性の共生の中で、新しい価値を生み出すことは、生命誌的世界観から見れば、自然なことといえるのではないだろうか。

もちろん、男性も女性も、「人間である」ということにおいては同じであることは強調しなければならない。ともに人間らしさの特徴である言語を持ち、想像力・創造力を働かせて、文化を創出する存在である。そこには男女の差異はなく、言語を介して「人としてのいのち」を丁寧に豊かに生きること、文化継承・文化創造の担い手にとになる。先に述べたように、足元の日々の暮らしを丁寧に大切にすることで、男女が「人としてのいのち」を豊かに生き、「生命誌的世界観」を実現していくことが、持続可能な社会づくりのために求められている。

### 3. 結語

以上の論をもとに、今後の女性活躍への視点としてどんなことが探れるだろうか。

地球環境問題が深刻化し、持続可能性が叫ばれている今、「生命誌的世界観」に基づく社会づくりが、これからますます重要になると思われる。機械文明・産業社会がすすめた成長論理に飲み込まれることなく、「生命誌的世界観」に基づくものの見方、考え方をもとに行動していくことが必要となるであろう。

そのためには、男性も女性も「人としてのいのち」を生きる場としての「生活」に価値を置き、「生活」の価値を復権することである。従って、何よりも希求されるのは、「ワークライフバランス」が実現できる社会であろう。ワークライフバランスの実現のためには、男性の育休や働く女性への支援が必要であるが、「仕事と家庭」「仕事と自分の時間の両立」といった文言以上に大切なことは、生活(ライフ)の重視であり、本稿に述べてきたように、家族や自分の時間の中で、豊かに文化的に生きるライフスタイルを一人ひとりが持つことが大事である。

共同・贈与・言語・想像・創造という営みの中に生活の文化を作り、生身の人間が持つ身体を通して豊かに感受し表出していくことこそが、人間が持つ「内なる自然」を豊かに生きることであり、「人としてのいのち」のあり方である。それを、日々日常の生活の中で、紡いでいく。土地の風土に根差し、そこから生まれた言葉と食、育児、養育、介護、余暇等を大切に、丁寧に心をかけていく。「地域」に根差した暮らし、生活の最小単位としての「家族」と「コミュニティ」、そして、人間が持つ想像力と創造力を遊びの世界で豊か

に表現させる「レジャー」、この3つのフェーズを豊かにする暮らしを実現できる社会こそが、持続可能な社会となっていく。

その生き方の中でキャリアを作り、持続可能な社会を作る担い手に自分自身になることが、これからの「女性活躍」としてあるべき姿となるのではないだろうか。

生命誌的世界観に基づく暮らしには、男性も女性も差異はないが、生物学的性として、女性が生命を生みなす性であることは事実であり、生物の世界は女性を軸にして40億年の歴史を紡いできたと捉える見方も可能であろう。その意味では、「生きものの生命をつなぐ女性」という捉え方から、女性が「人としてのいのち」に対する意識を高く持ち、生命誌的世界観に基づく社会づくりをけん引していくことは価値あることではないか。

生命誌的世界観に基づく社会づくりのため、女性が社会的役割をもってリーダーシップをとり、異なるものへの共感を持ちつつ、新たな社会をしなやかに切り拓いていく。ここに、これからの持続的な社会を拓く新しい時代の女性自立の姿が描けるのではないだろうか。

#### 註

1. 世界経済フォーラムが発表したジェンダー・ギャップ指数によると、2024年の日本の順位は146カ国中118位（内閣府男女共同参画局[https://www.gender.go.jp/international/int\\_syogaikoku/int\\_shihyo/index.html](https://www.gender.go.jp/international/int_syogaikoku/int_shihyo/index.html) 2024.10.19閲覧）。
2. 女性版骨太の方針2024（内閣府 [https://www.cao.go.jp/press/new\\_wave/20240709.html](https://www.cao.go.jp/press/new_wave/20240709.html) 2024.10.19閲覧）
3. 企業で働く男性の2023年度の育児休業取得率は、前の年から13ポイント増えて、およそ30%と過去最高となった（厚労省発表）。数日間の「とるだけ育休」ではなく、数か月が前提の、夫婦共に育児を行うための育休となっていると報道されている。（NHK首都圏ナビ <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240731/k10014531051000.html> 2024.10.19閲覧）

#### 参考文献

中村桂子：生命誌とは何か、講談社、2014  
中村桂子：生命科学から生命誌へ、藤原書店、2019  
中村桂子：人類はどこで間違えたのか、中央公論新社、2024  
広井良典：コミュニティを問い直す、筑摩書房、2009

すが・ゆきこ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・生活科学部現代生活学科 教授

